

ドイツ中世の‘stæte’な生き方 — 13世紀のイタリア人聖職者 Thomasin von Zerklære による ドイツ人騎士への教訓

尾 野 照 治

[序]

キリスト教会が成立してから、「キリストの戦士達」(milites Christi)が歴史に登場したが、その重要な概念は初めのうち使徒と伝道者のみを表していた。しかし、それは後に殉教者と苦行者をも表すようになり、それから更にその概念は、キリストのために悪魔と戦う聖職者という意味をも含むようになった。そして驚くべきことに、11世紀末にはそれが大きく転換して、キリスト教会のために武器をもって戦う「世俗の騎士」の意味で、初めて用いられるようになった¹⁾。世俗の騎士にこのような宗教的要素が加わったのは、貴族・騎士を味方につけようとするキリスト教会に、様々な思惑が生じた結果であると思われる。「神の平和」(Treuga Dei)運動に見られるように、本来は世俗の権力が担っていた政治面での平和の維持を、キリスト教会が担うようになったからである。1095年に教皇ウルバヌス2世は、十字軍参戦を促すためにクレルモン公会議で、参集した聖俗両世界の多くの人々を前に説教を行った。キリスト教徒はすべからく武装してパレスティナへ向かうべし、そして東方教会を異教徒の手から解放すべしと。さらに、信仰の敵に正義の戦いを挑むならば、現世で犯した罪は赦免され、永遠の報酬を獲

得できると²⁾。このようにして、聖界の軍務と俗界の軍務が、次第に融合していく。この宗教的な騎士概念が、俗界において広範な影響を及ぼすようになるのは、ラテン語ではなく母国語（ドイツ語）で詩作する教養人達が、この概念を受容するようになった頃からである。聖堂参事会員であり教訓詩人でもあるトマズインは、上述の新概念の受容とその伝播の点では、ドイツで最も大きな影響を与えたイタリア人詩人と言ってよい。彼の著作の中で、1215 年ないしはその翌年に、宮廷の聴衆達の母国語である Mittelhochdeutsch（中世高地ドイツ語）で著された「異国の客」(Der Wælsche Gast)³⁾は、ドイツ人騎士達に聖と俗の徳目について語った教育詩で、想像以上に甚大な影響を与えたものと思われる。一般に世俗の宮廷詩人が宮廷叙事詩・叙情詩において、騎士達の宗教的側面を語ることができるのは、大抵「十字軍」と「刀礼」を描写する場面であるが、しかし聖職者トマズインはそれらの詩人達とは異なって、宗教的側面を「異国の客」全体で説いている。

その「第九の書」では、「stæte と mæze は姉妹であり、同一の美德から生まれた子である」⁴⁾と説明される。stæte（心変わりせぬこと・不変性）は mæze（節度・中庸）とともに、キリスト教の基本倫理に深く関係しており、この概念で用いられる stæte は、当時のあらゆる道徳を実践するための基礎になるものと見なされていた。同様に「第二の書」では、「もし stæte が欠けているならば、他の美德はすべて無に帰するであろう」⁵⁾と述べられ、stæte がいかに重要であるかということが強調される。トマズインは「異国の客」の「第二の書」と「第三の書」で、数多くの例を挙げながら stæte を説いた後に、「第四の書」で再びそれを取り上げる。これは 12、13 世紀のドイツ中世において、stæte がいかに重要であったかの明白な証左である⁶⁾。聖界のトマズインのみならず、宮廷叙事詩・叙情詩を著した俗界の詩人達もまた、stæte をきわめて重要視した。

宮廷叙事詩の Tristan では、「愛、誠実、**変わることのない心**、名誉、その他多くの善美なるものは、愛に発する心の喜びが語られ同じ心の苦しみが嘆かれる場合ほど、それほどまでに好ましく思われたことは一度もないのです」⁷⁾ Parzival では、「南極が北極に対峙し共にその位置を変えないのと同様に、あなたの優しいお心はいささかも**心変わりしない**ということ、私は当然認めてよいと思って居ります」⁸⁾ Iwein では、「イーヴェインは彼女が独りになったのを見て、彼女の異常な悲しみ、痛々しい苦悩、夫に対して**変わる**ことのない愛情、妻としての貞節、そして夫を恋い慕う苦しみを目にしたとき」⁹⁾ 等の表現で、stæte はしばしば使用される。英雄叙事詩の Nibelungenlied では、「心の苦しみを訴えるには、**心の変わらぬ**友でなければならぬ」¹⁰⁾ 更に Walther von der Vogelweide の宮廷叙情詩でも、「男子たる者、勇敢で恵みの心篤く、その上に**変わる**ことなき心をも持っていると言われたら、それは完璧な賞賛の言葉である」¹¹⁾ 等の表現で、stæte は好んで使用される。

これ以後の叙述は、イタリア人トマズインが中世高地ドイツ語で著した「異国の客」の「第四の書」を、全体的に少しばかり換骨奪胎しながら分かり易く解説的に訳したものであって、単なる翻訳ではない。およそ 800 年前のこの作品をそのまま日本語に翻訳しても、その内容が一般の人に理解してもらえる可能性は低いと判断されたゆえである。厳密に校訂された中世高地ドイツ語のテキストは刊行されているものの、内容のある研究書は数少なく、現代ドイツ語訳もまだ出版されていない。そのことはまさしく、この作品を解説することの難しさを物語っていると思われる。

I.

トマズインはまず初めに、stæte の対語である unstæte (心変わりする不

誠実)を取り上げる。richtuom (富)の点で、unstæte はどのように私達を苦しめるのか。hêrschaft (支配)の点で、私達はいかに多くの拷問の苦しみを被るのか。maht (権力)の点ではどうなのか。name (名前)の点で、unstæte は人々を一日中いかに苦しめるのか。adel (高貴な家柄)と gelust (欲望)の点ではどうなのか。トマズインには不思議に思えることがある。それは、自分を最も激しく惑わすものの方を、私達がより深く好むという性質である。tugent (徳)よりも untugent (不徳)の方が快いと思える。上述の6つのものは、tugentによって求められるなら好ましいが、もし untugentによって体现されるなら、それらは全く無価値なものとなる。6つのものには絶えず不徳が付いてまわるので、人はそれらを介して一生懸命に不徳を求めることになる。richtuomには貪欲が付き物だ。しかし、私達が邪悪な心を持っていなければ、それほど意地汚く財貨を求めることはしない。hêrschaftには傲慢さが付き物だ。私達がそれほどまでに激しく支配権を欲しがるのは、傲岸不遜な心を持っているからである。さらに maht を求めるのは恥辱を、name を得ようとするのは虚栄心を、adel に頼るのは愚かしさを持ち合わせているからである。そして gelust の傍らには常に意地汚さが寄り添っている。善に精通している立派な人でさえも、何故これら6つのものによって苦しむのであろうか。これらに手を出せば、たとえ立派な人でもすっかり不徳へと陥落し、心の力を喪失してしまうのに。不徳を自分の主人として選べれば、心の力を失い、それと同時に高貴な家柄をも失ってしまう、つまり自由民から奴隷に落ちていくのだ。もし賢人ソクラテスがいま生きているなら、多くの自由民が不徳に隷属していると賢人は判断することであろう。ソクラテスは、徳操を守るためには多くの誘惑を退けるべきであり、財は無価値なものであると断固主張した。

swer sich dervor wil wol bewarn, / dern sol deheine wise varn /

nâch richtuom und nâch hêrschaft, /

nâch dem namen und nâch der maht. /

er sol sich ouch niht hart verlân / an sîn adel und sol niht gân /

nâch sîme geluste, so ist er wol / behuot als ein herre sol.¹²⁾

不徳から確実に身を守ろうとする人は、富・支配権・名前・権力の後に、決して従って行くべきではない。その人はまた、自分の高貴な家柄にすっかり頼ってはならぬし、自分の欲望を迎えに行くべきでもない。そうすればその人は、立派な人が守られるように、しかと守られよう。

II.

自分の心を富に委ねる主君は、欲望を自分の主人として選ぶことになる。欲望の足元に奴隷としてひれ伏す人が私に命令をくだすなら、私は怒らずにはいられない。恥知らずゆえ欲望の奴隷となって絶えずそれに仕えている人に、城や領土は全くふさわしくない。心を hêrschaft（支配権）に委ねる主君も、恥知らずで不遜な心の奴隷になるので好ましくない。そのような者が家来をもつのは、筋違いである。傲慢な心に仕えているような話しぶりや振る舞いは、変節しない心を維持できないことの証である。権力に身を委ねる人も心の力を失っており、さながら奴隷のように卑しく恥辱夫人に仕えなければならぬ。分別を持っているのにそのようになったのであれば、なおさら軽蔑される。悪魔に導かれるなら軽蔑され、恥辱夫人に誘われるなら救われぬ。夫人が行うことは、分別なき者の眼には素晴らしいものに映るのだから。名声を追い求めようとする人は、虚栄という不徳に仕える。彼は奴隷身分であり、どのようなことにも心変わりする主人に、常に仕えなければならない。それゆえ、たとえ自分の名前を世に広めたところで、何の役にも立たぬ。心変わりを虚栄ではないと言ってよいなら、当然ながら誠実を不誠実であると

言ってよい。

高貴な家柄に頼る人は、愚かさを主人として戴いている。その場合、学んで賢くなることは、かえって愚かである彼の価値を下げることなのだ。なすべきことを学ばない愚か者によって正しく治められた国など、これまで存在した試しがない。このようなことで人が苦しみを受けるのなら、彼の高貴な家柄はどうでもいいものだ。かつて父祖が高貴であったとしても、今の彼自身は愚かさの奴隷なのだから、高貴な家柄は何の役にも立っていない。柱を取り去れば、屋根は残らない。心の卑しい愚かな人は、父祖伝来の高貴な家柄をしかるべく受け継いではないのだ。

Swær dem gelüste volgen wil, / der hât vrouwen harte vil, /

Trâkeit unde Leckerheit, / Huorgelust und Trunkenheit. /

die habent über in gewalt, / er ist ir erbeigen halt.¹³⁾

欲望に従おうとする人は、とても多くの女主人を持っている。即ち怠惰夫人、意地汚さ夫人、淫猥欲望夫人、酩酊夫人である。彼は、彼を支配している夫人達のまさしく相続財産そのものだ。

「酩酊夫人」のもとで蜂蜜酒とワインの支配下にある人は、全くその資格がないのに何故支配者になろうとするのであろうか。酒の力に飲み込まれる人は、酒の奴隷ゆえ支配者にはなれぬ。「意地汚さ夫人」のもとで食べ物にかまけている人が、どうして支配者になろうとするのか。彼は意地汚さのまぎれもない馬鹿子分であるのに。「怠惰夫人」のもとでいつも足を組んで寝そべっている人が、どうして支配者になろうとするのか。彼は、その夫人に喜びを感じている怠惰の奴隷であるのに。そして「淫猥欲望夫人」がいてくれば安心できない人、その夫人の支配や命令に唯々諸々と従う弱い人は、決して自由であるとは言えない。どこにおいてもこの夫人の足元に踏みつけ

られている人は、すっかり笑い者にされている。この夫人のために心を酷く貶めている人は、君主として命令を発することなどできるはずがない。このような人の仲間だと言われるくらいなら、私は永遠に呪われるほうがましである。

III.

前章でトマズインは、不徳に対していかに私達自身を守るべきか、心変わりが私達をどのように苦しめるのか、各人が何故に分相応でいなければならないのかについて、詳しく説明した。この章からは、徳操と心変わりなき誠実さについて説明される。

Ich sprach daz unstæte sî / allen untugenden bî :
nu sult ir ouch wizzen wol / daz diu stæte wesen sol /
aller tugende râtgebinne; / wande mit der stæte sinne /
sol man die tugende vol bringen.¹⁴⁾

不誠実はすべての不徳の傍らにあると、私は言った。さあ、あなた方は覚えておきなさい、誠実さはすべての徳操の助言者であることを。なぜなら、徳操は誠実の心で成就されるべきだから。

若い時も年老いてからも、徳操において常に心変わりしないように努め励むべきだ。誠実さの裏づけがない徳操は無意味である。というよりはむしろ、誠実さの無い徳操はそもそも存在しないと言える。それでは一体、心変わりせぬ誠実さとは何であるのか。それは変節することのない心のことで、あらゆる善意を成就するものである。多くの誠実さを心に備えていない人は、徳操なき人である。その反対に、善意において心変わりせぬ人は、徳操高き人

である。ただ一つの徳操を持っても、徳操高い人を作りあげることにはできない。徳操高い人になろうとするなら、たくさんの徳操を心に備えなければならぬ。その徳操は、老人にも若者にも役立つものである。

富と貧乏は、邪悪な心の人々には、全く何の役にも立たない。邪悪な人は、富にも貧乏にも卑しい心を抱くが、善良な人は、貧乏人であれ金持ちであれ同等である。善良な人は、貧しさによって自分の心を卑下することがなく、富によって思い上がることも決してない。立派な人は財貨をどれほどたくさん持っていようと、それを良いことへ振り向けるだけの分別と方策を持っている。彼はそれを他の人々に分かち与えて貧しくなったとしても、嘆いたり悲しんだりはしない。心の邪な人が金持ちになると、自分の財貨を分かち与えず、独り占めしようとする。彼の財袋が一杯で、もうこれ以上その中に入らない場合にのみ、まわりの人々はおこぼれにあずかることができる。しかし、彼がひどくめかしこむようなら、まわりの人々は衣服のおこぼれにあずかれず、寒さに震えることになる。有能な人は、君主になればとても謙虚になる。彼の支配は立派であり、思い上がることは一切ない。しかし、くだらぬ人が君主になるとのぼせ上がって、これまで知己であった人々のことが分からなくなる。無理に威厳をもって振る舞おうとしても、名誉が何であるかを理解していない。真の名誉をわきまえた君主は、親しい人々に対して、これまでよりも一層大きな敬意を表する。もし親しい人々が敵になるなら、それは不名誉から生ずること。有能で立派な人は、権力を獲得しても暴力を振るうことは決してない。いつも貧しい人々を助けることに勤しんでいるのだから。ところが、くだらぬ人が権力を獲得すると、かつて自分に加えられた行為に見境なく報復しようとする。これまで喜んで仕えてくれた人々にさえ、恩知らずに報復をする。

立派な人が高名になっている場合には、噂されている以上に立派に振る舞おうと努力する。誤ってなされた過小評価よりも、立派であるという事実の

方が彼には望ましいからだ。それとは反対に、心卑しい人が高名になると、その名声を損ねないように用心することができず、思い上がりの心に溺れてしまう。立派な人が高貴であるなら、どのようにすれば父親よりももっと高貴であると言ってもらえるか、気高い心栄えゆえに努め励む。くだらぬ輩が高貴な家に生まれると、他の人々を馬鹿にして、自分の行為は高貴で立派であると思ひ込む。立派な人は、自分の思い通りにやり遂げても、欲望をすっかり満たすことはない。確実に卑しいことを遠ざける人は徳操高き人であるが、しかし卑しいことすら行う力を持たない人が、それをしないでいる場合には徳操ある人とは言えない。

先述した6つの項目のうちの5つ、すなわち guot (財貨)、hêrschaft (支配)、macht (権力)、name (名前)、adel (高貴さ) は、徳操高き人にとっては極めて有効なもので、老齢においても若年においても、その人の徳操を開いて見せてくれる。徳操高き人の「財貨」は、物惜しみしない人としての力を表わす。他方、吝嗇な人の「財貨」は、その人のけちな心を表わす。不徳な人の「支配」は、その人の思い上がった心を表わすが、もし彼が物惜しみをせず立派な人であるなら、「支配」は彼の謙譲を表わす。不徳な人の「権力」は、その人の暴力を表わすが、徳操ある人の「権力」は、立派な裁きを表わす。不徳の人において多くの不徳を暴露するものは、徳操ある人においてはその徳操を見事に明かす。「名前」や「高貴さ」についても、同様のことが言える。立派な人は自分の身に起こることをすべて、良きものへと向ける。喜ばしいことが起ころうと、苦しいことが起ころうと、立派な人には幸せが訪れる。それとは反対に、心の邪な人の身に起こることは、何ともうまくいかない。

心の邪な人に財貨ができると、彼はそのことによって思い上がりの心を抱く。しかし、欲するものを獲得できなければ、その後ずっと嘆き続ける。それとは反対に、立派な人に悪しきことが起ころうと良きことが起ころうと、

彼は常に平静さを失わない。世間ではしばしば、立派な人よりも心の邪な人の方が幸せになっていると不平をこぼす。立派な人は、そのような発言内容が全くの偽りであることを知っておくべきだ。心の邪な人に良いことが起こっても、それはふさわしいことではないので、彼が幸せとは到底言えない。それとは逆に、その人に良からぬことが起こっても、全く不幸せだということにはならない。心の邪な人は、二種類の不幸を担っている。一つは彼が悪事を行うように準備されているという不幸であり、もう一つは、軽い罪を絶えず犯しているという不幸である。それは神が懲らしめのために、彼に災いをもたらすほどではない罪なのであるが。

昔の神は旧約聖書では、罪をいささかも容赦することなく懲らしめておられた。罪を犯した人々は、神による懲らしめとして打ち殺されたり、倒れ死んだり溺死したり、らい病を患ったり焼き殺されたりした。しかし、罪を悔い改めた人々は、今の私達よりももっと良い恩寵を授かった。

wan wir mugen wol dā bī / wizzen daz uns dort wirs geschiht, /
sīt er uns hie zūhtigt niht.¹⁵⁾

なぜなら、私達は罪を犯したとき、次のことを知って当然ですから。つまり主（神）がこの世で私達を懲らしめてくださなければ、私達はあの世でもっと酷く懲らしめられるのですから。

私達が神の恩寵にあずかれない程の悪行を犯すのは、懲らしめる神がいまでも存在なさることを、無知ゆえに信じていないからだ。神が不正な人に懲らしめをなさる場合でも、その人が悔い改めて恩寵を授かるやり方を悟れば、彼にとってその日は喜ばしき一日になる。それとは反対に、不正な人が多くの悪行を重ねたことに思いを致しても、畏怖することがなければ地獄に堕ちる。とても多くの不幸に見舞われるのではと恐れざるを得ない罪深き人には、

当然あれこれと災いが降りかかってくる。良きことに精通している人なら、正しい立派な人よりも不正な人の方が幸せであるなどと、決して言うはずはない。正しい立派な人は、良きことを当然のごとく受け入れ、良からぬことに誘惑されないからだ。その性質は後に、彼に大いに役立つ。神がお喜びになる善良なことをいつまでも行い、悪魔の悪しき誘惑に対してはどこまでも踏ん張って耐える。この善良さと忍耐力は、それぞれが彼に報酬をもたらしてくれる。

IV.

幸せを獲得したい人は、それを徳操によって得なければならない。しかし、徳操のない人は、もし世の人々を支配できる程の大きな力を持っているなら、実に不幸せである。そして、不正を行う人の方が、実はその被害者よりも不幸せである。人の不正を裁く立場の人は一般に、被害者が損害を受けていると考える。しかしトマズインは、不正を行った人の方が損害を被ると考える。つまり暴力を振るわれた人よりも、むしろ暴力を振るった人の方が不幸せであると。なぜなら邪悪な心が、暴力を振るうという罪を犯させているからだ。暴力を受けた人は、罪には関係していないし邪な心を持っているわけではないので、神から懲罰を受けることはない。確実に正しく裁く術を心得ておられる神が裁きを行われるときに、つまり最後の審判の際にそのことは明らかとなる。

分別を持たない人は、無造作に言う：「立派な人がくだらぬ人の足元にひれ伏してずっと仕えているのを、神は長い間ぐずぐずと我慢しておられる」この発言は全くの考え違いである。神がどれほど長く我慢されようと、そのことは邪な人に役立つことはないし、立派な人の妨げになることもない。神は両者に与えるべき相異なる報酬を、常に持っておられる。邪な心の人には、

不興と不幸を与え、立派な心の人には、被害に耐え忍んだだけの良い報酬をお与えになる。この世で起こることはすべて、起こるべくして起こっているのだ。予定調和からはずれて起こることは何もない。しかしそうだとするのなら、私達がたくさん罪を犯すのを神が見過ごされるのも、予定調和と言えるのであろうか。その通りで、私達の心が神に見過ごしてくださるようと仕向けたのだ。ゆえにこれは、私達の責に帰せられるべきことである。罪な行為が私達のせいであれば、そのようなことが起こるのを神は決してお認めにはならぬ。私達の眼から見て間違っていることも正しいことも、悪しきことも良きことも、すべてを神がその時期に応じて、予定調和として起こさせておられるのだ。従ってこの世では、何一つ不当に起こることはない。

理解力の乏しい人は、次のように言いがちである：「一切のことが、当然に起こるべくして起こっていると言うのであるから、他人の財産を盗んでも、あるいは他人を殴り殺しても、それは予定調和として当然に起こっているのだ。このように当然に起こっているのに、何故これを裁かねばならないのか。裁く必要などないではないか。」しかし、このように言う人は、何が正しくてなにが不当であるのか、全く理解できない人である。

daz ich spriche ist harte sleht / ze verstên: got siht den muot /
baz dan daz der man getuot.¹⁶⁾

私が言うことは、実に明瞭に理解されるべきだ：神は、人が行う行為よりも、その心の方をもっと良く見ておいでになるということ。

神の指図による正しい目的で他人を打ち殺した場合には、殺された人のことを嘆くには及ばない。しかし、財貨を奪うために他人を殺害した場合には、殺された人は当然にそうされるべき人であったのだが、殺した人はその邪な心ゆえに裁きを受けなければならない。改悛すべき正しい心を持っていない

人は、幾度も不正を犯すことになる。一度犯した罪を償わずに更にいっそう大きな罪を犯すのは、邪な心による行いであり、これも起こるべくして起こっている。善意をもって行うのでなければ、必ず裁きを受けることになる。たとえばダビデ (Dâvit) は、神の御心に背いて多くの無謀なことを行ったために、その息子アブサロン (Absalôn) は父を嘲り国の統治をさせなかった。その後、アブサロンは打ち殺された。父親を軽んじ排除して、自分が統治者になろうとした傲慢な心のために、神の裁きを受けたのだ。正義のために正しいことをするという義務を怠ったからである。

私達がたとえ教会を建てたとしても、悪しき気持ちから建てたのでは、それは邪な行いであるから罪になる。神の御心はいつも、正しい心による行いと邪な心による行いの区別をして、それぞれに名前をお付けになる。人の心の持ち方次第で、その行いは邪なものにもなるし、善良なものにもなる。たとえば、酔っ払っているのが分かっているのに、その人にさらに酒を贈るのは良い施しとは言えない。ところで、悪魔が暴力によって人を悲しませるのは、不当な行為と言うべきであろうか。トマズインは、これも全く予定調和の中で行われていると説く。神はあくまで、当然に起こること以外何も起こさせないでられる。

神は悪魔に対して、邪惡に振る舞う人を支配できるように、しばしば力をお与えになる。勿論、善良な人にも力をお与えになる。悪魔が神の不変性 (stætekeit) を試すのを、神は拒絶なさらない。そのことを勘案すれば、善良な人には更に良いものが与えられると推察される。たとえば善良なヨブ (Îob) が、どれほど幸せであったのかを見れば分かる。ヨブは自分に罪がないのに拷問を受けたとき、神のお慈悲を受けたことに気づいた。それまでよく悟れなかった神の不変性を、その時しかと認識したのだ。このことを考えれば、神が悪魔に何かをさせてられるのを、当然性をもって行われていないと言ってはならぬ。すべては予定調和の中で行われているのであるから。

神の言葉で話す人ゆえ、その人から私達がたくさんの良きことを教えてもらえる聖者がいる。この聖者グレゴリウス（Grêgôrius）は、悪魔の力が邪悪なのではなくて、その意志が邪悪なのだと説く。

nu seht daz sîn gewalt ist guot / dâ von daz er dâ mit tuot /
schaden dâ sîn got hengen wil. / sîn übel hilfet ouch vil /
den guoten: swaz der übele tuot, /
daz wetzet dem guoten sînen muot.¹⁷⁾

さあ見よ、神がお許しになる所で、悪魔は力づくで損害を与えるゆえに、悪魔の力は良いのだということを。悪魔の悪事も、善良な人々に大いに役立つ。邪悪なその人が行うことは、善良な人の心を奮い立たせるからだ。

悪魔のように神の恵みにあずかれない不幸な者でさえも、力を発揮できるように神は意図しておられる。邪悪な人が善良な人に不当な振る舞いをするとき、善良な人はそのことによって更にいっそう幸せになれる。すなわち、邪悪な人は邪悪な人にしか、損害を与えることはできない。邪悪な人が善良な人に不当な振る舞いをするとき、そのことによって邪悪な人は善良な人の立派さを、よりいっそう大きくしていることになる。聖パウロ（Paulus）は、邪悪な人々がいなければ打ち殺されずに、今日なお生き続けているであろう。しかし、パウロはそのことを決して嘆くには及ばぬ。なぜなら、パウロを打ち殺した人は、地上の大きな苦難から彼を、神の国へと解放してあげたことになるのだから。

V.

分別のない人は、えてして次のように言いがちである：「善良な人が望むものを、いつもすべて持てるようにしてあげるのは、正しいことだと思う。しかし、邪悪な人には、望むものを決して持たせてはならない。そうすれば両者ともに、自分の持分が得られよう。」この考え方は正しくない。善良な人も邪悪な人も、この世では苦しみも喜びも双方に与えられるという点で、平等であるべきだ。なぜなら、善良な人も邪悪な人も、神に対する希望と畏怖をとともに心の中に抱くべきであり、そのことが神の御心でありお計らいであるからだ。自分の望むものがいつも好ましく与えられるようにと望む人は、神に対する畏怖を抱いていない。いつでも神のお慈悲を得られるものと、不当に思い込んでいるからだ。しかし、神に愛してもらえているかどうかは、誰にも分からない。神のお慈悲にあずかれなければ、死んでしまう程の罪が自分にあるかどうかということは、誰にも分からない。苦しみの種がいつもわが身に起こる人は、天国に召し上げて欲しいとの望みを、ややもするとすっかり捨てがちである。というのは、あの世でどうなるのかは、誰にも分からないのだから。善良な人も邪悪な人も、皆同じように喜んだり悲しんだりするのは、あの世のことは分からないということを私達に自覚させるための神の配慮なのだ。愚かな人は、神が矛盾したことをしておられると非難する。天国への希望を抱き続けている人を苦しめ、他方で、その希望を捨てた人を喜ばせていると。しかし、いついかなる時も罪を犯さずに生きられる人は、全く存在しない。どれほど立派な人でも、この世で自分の罪の償いをすることは正しいことであり、それゆえに苦しむことがある。此岸で罪の償いを行えば、彼岸で無限に喜びを抱くことができる。従って、立派な人にこの世でどれほど苦しみを与えられようと、彼は惑わされることがなく、不服を言い立てることもない。彼には死後に、永遠の幸せがもたらされるのだから。

邪悪な人には、この世で幸せなことがあまり起こらない。彼にはその少しの幸せさえも無価値に思えるほどに、あの世で苦しいことが起こる。しかし、立派なことを全く行ったことがないほど、邪悪に凝り固まった人はいない。邪悪でないわずかな分だけでも、この世で幸せを享受するがよい。いずれ彼は現世でも来世でも、多くの苦しみを被るのであるから。その人はたとえ生涯幸せだと喜んで、この世を去るにあたって喜びを捨てられずに苦しむ。他方、善良な人にこの世で幸せが与えられるのは、その善行のゆえであり、この世ばかりかあの世でも、当然ながら幸せが与えられる。たとえ善良な人にこの世で苦しみが与えられても、かえってそのことがあの世で彼に幸せをもたらすことになる。邪悪な人には、回心してもらうために苦しみが与えられる。もし回心することを拒絶するなら、あの世でもっと酷い苦しみが与えられる。邪悪な人にこの世で幸せが与えられても、そのことがあの世で彼に幸せをもたらすことは決してありえない。

以上の話から、この世に起こる幸せと不幸せのすべては、当然のごとく起こっていることを覚えておくべきだ。役に立つものはすべて善であり、幸せも不幸せも同じ働きをする。不幸せは邪悪な人を苦しめるので、回心させる契機になる。他方、もし彼が生涯幸せであれば、その分あの世で苦しむことになるので、幸せもまた彼の役に立つ。幸せと不幸せは、勿論のこと善良な人にも役に立つ。不幸せはその人の心を確固不動のものにするし、幸せは言うまでもなく彼の善良さに報いる。

unsælde stætigt im sin muot / und sælde lönt im, daz ist wâr. /
 dâ von hân ich gesprochen gar, / swaz in dirre werlde geschicht, /
 daz geschicht zunrehte niht.¹⁸⁾

不幸せは善良な人の心を確固不動のものにする。本当に、幸福はその人に報いる。それゆえ私は、次のことをすっかり話したのだ：この世に起

こることは、必ず起こるべくして起こるということを。

この世に起こることで、不当に起こることは何一つない。一切が起こるべくして起こっている。従って、神が私達に幸せと不幸せを与えられるとき、私達はいつも心に畏怖を抱いているべきである。賢明な人はだれでも、不幸せが決して永遠の苦しみをもたらさないように努めるべきであるし、現世の幸せが永遠の幸せをもたらすように励むべきである。そうすれば彼は、神によって正しく導かれていることになる。

VI.

幸福は善良な人にとっては常に役立つが、邪悪な人にとっては有害になることがある。邪悪な人が幸福であれば、自分の邪悪な意志を更にいっそう遂行しうるので、幸福は彼に大きな損害をもたらす。他方、不幸は善良な人にとって、常に役立つ有用である。しかし、邪悪な人にとって不幸は有害であり、その不幸が邪悪な人を回心させない場合には、彼はあの世でいっそう苦しめられる。その事情は、穀竿が麦穂を打穀して、殻から穀粒を打ち出すのと同様である。穀竿は神がお与えになる不幸（苦しみ）、穀粒は善良な人、殻は邪悪な人の比喩である。善良な人にとって良いものが、しばしば邪悪な人を苦しめる。何故にこの人はいつも幸福であるのに、あの人は不幸であるのか、その理由を知ることは誰にもできない。しかし、それは全く起こるべくして起こっている。神の御心のなすがままである。そうであるなら、トマズインは全く何も分からないままに、知ったかぶりで話しているのであろうか。否、そうではない。何故この病人には甘い食事がふさわしく、あの病人には苦い食事がふさわしいのか、その程度のことが分からなければ、トマズインは大きな間違いを犯すことになる。

また、医者は身体を隅々まで把握しているはずなのに、どのように処置したらよいか分かっていないのだとトマズインが主張するなら、その場合も彼は間違いを犯すことになる。主君が何故そのような振る舞いをするのか、召使にさえ分からないことがある。ましてや、神がある人には多くの喜びをお与えになり、他の人には多くの苦しみをお与えになるのは何故か、ということを知りたがるのは全くの愚行である。神の御業の理由さえも知ろうとするのは、心が貪欲過ぎる。しかし、私達は一般的に、何故にある病人は甘い食事を欲し、他の病人は苦い食事を摂取すべきかを知りえないのに、他方で、この人はたくさん財貨を所有し、他の人はもっとたくさん所有しているのは何故なのかを、無謀にも知りたがる。神はそもそも何を考えておられるのかと不思議に思う。そして、私達は愚かにも次のように主張する：「この人でさえそれほど持っているのだから、あの人ならもっとたくさん所有することが許されると思われる。それなのに神は、立派な人を貧乏に譲り渡し、軽蔑されるべき人を裕福にしようとなさる。神とは奇妙な振る舞いをなさるお方だ。神のようなお方が、そのような間違っただけのことをなさるべきではございません。」

このように思い上がった言い方をする者に対して、トマズインは説得する。医者は私達の傷を切除する時に大きな痛みを与えるが、しかし其の時、私達はその医者から酷いことをされるなどとは、決して言わない。痛くても医者を信頼して、したいように治療することを許す。

wie getar danne dehein man / wider den klagen der dâ kan /
ein ieglich sêle erzen wol / dar nâch und er si erzen sol ?¹⁹⁾

それなのに、どの魂をも然るべく癒す術をご存知のお方（神）に対して、人はどうして敢えて不平を言おうとするのか。

ある人は、金持ちになると愚かになるので、富は自分のためにならないと言う。ところが、金持ちになっても心が揺るがない、意志堅固な人がいる。このような人にとって、富は実のためになる。それと同様に、病気が大いに役立つ人もいる。健康だと、あまりにも思い上がる人である。しかし、健康を常に良きことに向けられる人には、健康が大いに役立つ。この例え話によって誰でも理解できるように、なすべきことしかなさらない神は、一切のことを十分にご存知である。それゆえ、神は当然なすべきことをなさっていないなどと、身の程知らずの愚かな非難をすべきではない。神は、幸福な生活あるいは不幸な生活を、誰に与えるべきかをしかと心得ておられる。私達の病状に応じて、さながら医者のように適確に治療をしてくださる。それなのに、神はもっと良い治療ができるはずだと言うなら、私達は心の中から高貴な名医を追い出すことになる。そのような思い上がりを抱くと、無限の智慧を持っておられる名医を、もはや二度と得られない。

見事に治療する術を心得ている医者は、喉の渇き、空腹、火熱によって病人の治療を施す。医者は病人を壁に縛りつけ、切ったり刺したりの手術を行う。あるいは病人を眠らせてはならない時には、髭や髪を激しく引っ張る。あるいは病人をよく眠らせるために、食事を与えて飢えさせないように努める。私達の主も、心を癒してくださる時には、医者と同様のことをなさる。幸福で治療したり苦しみで治療したりして、私達の病状に応じて適確に癒してくださる。それゆえに善良な人は誰でも、私達の主がなさることを善であると見なすべきだ。そのように見なせる人は、大きな幸福を得られるので、この世で我が身に起こることを嘆くには及ばない。しかし、そのように見なせず、神の御業が苦しみの種だと不平をかこつ人は、多くの不幸を背負うことになるざるを得ない。従って、苦しみを意識せず自分に与えられた不幸に耐えられる人は、恐れを抱く必要は全くない。その人は、自分の不幸を良きものへと、確実に振り向けることのできる人であるから。

Ob ir mich rehte habt vernomen, / sô sult ir haben war genomen /
daz der tugenthafte man / nie deheinen schaden gewan /
weder von manne noch von wibe.²⁰⁾

あなたは私の言うことを正しく聞き取るなら、次のことを知るべきだ：
徳操高き人は、誰からも決して損害を受けなかったということを。

彼が不当なことをされても、それは損害ではなくて、彼にとってためになることである。それなのに、次のように間違ったことを言う人がある：「不当なことをされると、私は徳操を捨てて不徳の人になりさがる。そのことによって、私は損害を被る。不徳は神の国から私を遠ざけるので、私は確かに大きな損害を受ける。」しかし、立派な人にこのような事態が生じたのを、トマズインはこれまで一度も見たことがないと主張する。もしこの間違った発言が真実となるなら、喜びが徳操を追い出すのであれ苦しみがそうするのであれ、その人の徳操は変節することのない誠実さを持っていないことになる。真に徳操高き人は、若年においても老年においても、自分の徳操を捨てることなどとてもできるものではない。他人が彼の財貨を奪っても、徳操の心まで強奪することはできないのだ。本人以外の誰も、徳操と雄々しさを彼から奪い取ることはできない。なぜなら、内的なものは外的なものに、決して屈しないからである。

トマズインが持っている徳操を奪い去られ、軽蔑すべき人に落ちていけば、彼を確実に害することができる。しかし、誠実な徳操をもつ彼を、実際にそのようにして害することはできないので、真の害という意味では、人は自分以外の誰も害することはできない。つまり、他人を害する場合、その人の不徳が手伝いをしてくれるのでなければ、害は実現しないのだ。不徳を持っている人を害するのは、簡単なことである。堀が壁に近ければ、その壁は容易に崩壊していくものだ。このことは、神を畏れ敬うヨブの例で明らかである。

悪魔はヨブを不徳へ誘い込もうと試みたが、うまくやりおおせなかった。神がヨブにお与えになったどんな苦難（試み）も、ヨブは呪うことなくすべてを受け入れた。神を畏れ敬うヨブは、苦難をしかるべく受け入れたので、悪魔が付け入る隙はなかった。悪魔の策略も他の誰の力も、徳操高き人を害することはできない。そのことは、ヨブの例で明らかである。徳操高き人を害しようと追及する人は、その害をすべて自分が受けることになる。そのことは、カイン（Kâyn）の例で明らかである。カインは愚かであるゆえにアベル（Âbel）を打ち殺し、自分だけをすっかり害することになった。なぜなら殺されたアベルは、行きたかった神の国へ行けたのだから。私達は神の法廷（最後の審判）で、誘惑されたがために正しく振る舞えなかったのだと弁明できるか否か、そのことを生きている間に十分に考えるべきだ。なぜなら、私達を害することは誰にもできないし、ヨブを惑わす物は何もないからだ。魚のたくさんの小骨よりもっと数多くの悪智恵を、ヨブに対して使い尽くしても、決してヨブを惑わすことはできなかった。ヨブは新約も旧約も聞いたことがないので、当然ながら警告を受けたことはない。

sît îlob ungewarnet was, / wan er enhôrte noch enlas /
 die niuwen ê noch die alten, / wie mag uns iemen gewalten /
 daz wir lân tugent und got ?²¹⁾

ヨブは新約・旧約を聞いたことも読んだこともなかったゆえ、警告を受けていなかったのによしとしても、新約・旧約によって戒律を受けている私達に、徳操も神も捨ててしまえと、どうして私達に無理強いできようか。

新約・旧約の教えによって、私達は神の法廷では弁明できないという戒律を授かっている。不徳の人が自ら不徳と戦うのであれば、あるいは自分で自

身を助ける生き方をするのでなければ、誰もその人を助けてはくれない。それとは反対に、自ら不徳と戦い自らを助けようとする人を、私達の主はすぐに助けようとなさる。このことは、長い間罪に陥っていたマグダレーネ (Magdalène) の例で明らかである。自分自身を助けようとしらない人は、いつまでも軽蔑されるべき人である。このことは、自分の罪を悔い改めようとせずに、罪に堕ちたままだったユダ (Jûda) の例で明らかだ。ファラオ (Phâraô) はしばしば神によって試されたが、不幸なことに自分の気持ちを和らげようとはしなかった。ところがニネヴェ (Ninivê) は、自分の国にヨナ (Jonâm) が送られてきたとき、すぐに改心したのだ。

徳操が備わっている人は、決して損害を被ることはない。他方、不徳に満ちている人は、どうにも助けようがない。イスラエルの民はどの民族よりもよく統治されたが、しかしそのことは彼らの役に立たなかった。彼らは神とモーゼ (Moyse) の戒律に背いて、自分達のために偶像を作ったのであるから。ジードラーハ (Sýdrâch)、ミーザーハ (Mÿsâch)、アベドナゴー (Abednagô) の三人の子供達は、長い間しつけを受けぬまま異教の中に居たが、しかしそのことは彼らにとって何の妨げにもならなかった。従って、私達は若いからと言って、弁明が許されるわけではない。かの三人の子供達を、喜びによっても苦しみによっても、徳操から引き離すことはできなかったのだから。キリストはユダをいつも好意的に扱っておられたが、そのことはユダにとって何の役にも立たなかった。キリストの教えのためにも御印のためにも、ユダは心を和らげようとはせず、不徳を捨て去らなかった。ユダはそれほどに卑しい人として、呪われていた。パウロ (Paulo) はこの世でキリストに会ったことはないが、そのことは彼にとって何の妨げにもならなかった。なぜならパウロは、神の戒律を受け入れて以来それを破ったことはないし、今はめでたく神の傍に居るのであるから。彼は永遠の苦しみから免れたので、かつて苦しみを被ったことは、彼にとって何の妨げにもならな

かったことが分かる。ラザルス (Lazarus) は貧しかったが、そのことは彼にとって妨げにはならなかった。私達が善良なことを行おうとすると、富も貧困も私達を惑わすことはない。貧しかったラザルスは永遠の富 (神の国) を獲得しているが、この世で金持ちであった者らは地獄で焼かれ苦しんでいる。義人ダニエル (Dānjel) は牢獄に入れられたが、不徳まみれの人ラークス (Lâcus) のような不徳を持つことはなく、異教徒の中でキリスト者として立派であった。それゆえ、私達も徳操さえ持っていれば、どのような邪惡の支配にも惑わされることはない。聖書に見られるように、ヨゼフ (Jōseph) は女達の誘惑から身を守ったので、その結果私たち男は生きながらえることができる。アベルにとって死は何の妨げにもならなかったので、その事実から、どのような苦しみも善良な人を騙せないことは明らかである。

私達に損害や恥辱を与えるものは、一般に不徳と呼ばれているが、しかしいかなるものもその不徳によって、立派な人を害することはできない。というのは、害を加える不徳は、善良な人の心の中に住みつくことができないからだ。善良な人を害するものは何もないので、その人は安全である。そのようにいつも安らかな気持ちでいる人には、長い歳月が短いと思われる。しかし、いつも恐れを抱かざるを得ない人は、おどおどとして短い時間が長く感じられる。後者をこのように思わせるのは、不徳と罪である。従って、不徳の人は苦しみゆえに臆病でいなければならないが、それに対して立派な人は、何によっても害されることがないので、勇敢でいられる。立派な人は神の戒律をより良く遂行するために、ただ神だけを畏れる。立派な人と邪惡な人は、神の畏れ方が異なっている。

der übel vürhtet gotes geriht / des tuot der guot sô harte niht, /
wan er wirt dâ gekrœnet, / sô wirt der übel dâ gehœnet.²²⁾

邪惡な人は神の裁きを恐れるが、立派な人はそれをあまり恐れぬ。

なぜなら、立派な人は神の裁きで賞賛されるが、邪悪な人はそこで蔑まれるからだ。

後者は受け入れるべきものを恐れ、前者はそれを取り逃がすのではないかと心配する。立派な人々の恐れは、神の愛によって甘美なものにされているが、邪悪な人々の恐れは、いっそう苦い胆汁を混ぜられている。前者の恐れは徳操から生じ、安らぎを持っている。後者の恐れは不徳から生じ、苦しみと悲しみを持っている。前者は神の力以外に何も恐れないが、後者は一切のものを恐れる。

VII.

立派な人は何も恐れるには及ばず、たとえ財貨を持っていなくとも心は豊かである。その人の徳操も、用心すればもっと良い形で現れる。というのは、貧しいけれども卑しい金儲けを避ける人にとって、自分が金持ちであるか否かということはどうでもよいと思われるからだ。立派な人は、病気のために自分の体に起こることを恐れるべきではない。なぜなら、立派な人の体が健康を失うと、心の方がいっそう健康になるからだ。立派な人は自分の体に何が起ころうと、我慢強さが幸いして心まで病むことはない。それゆえに、立派な人にとって病気は大いに役立つ。病気のために彼の心は、かえって強化されるのだから。また立派な人は、追放されるのではないかと恐れるべきではない。最も保持したい徳操が、彼自身のもとに留まることになるからだ。自分の徳操を捨てるのでなければ、彼の家がどんなに遠くにあっても、彼はいつも自分の家に居ることになる。心の中に徳操、善良、礼節を持っていないければ、たとえ我が家に居ても追い出される。立派な人は、たとえ牢獄に繋がれることになろうと、恐れるには及ばない。邪悪な人はどこに居ようと、

また気持ちをどのように持とうと、絶えず不幸に支配されているが、それとは反対に立派な人は、心の中に徳操と善意の慰めを持っているので幸せである。立派な人が繋がる牢獄は素晴らしい所ではないが、彼の心は最高に美しく飾られている。このように、彼の心の中の家には素晴らしい徳操の光が射しているので、牢獄がどれほど暗く居心地が悪くても、それは彼にとってどうでもよいことである。

徳操が立派な人に、どれほど多くの素晴らしきものを与えるかということを知らない人は、えてして次のように問いかける：「どのようにすれば、人は恐れを抱かずに生きていけるのであろうか。」このように問う人は、徳操が求めるところに従って生きることができず、それゆえ徳操が何を与えてくれるのか、試すことができなかった人である。正しい徳操を心に備えている人は、死を全く恐れるべきではないが、しかし他の苦しみをいかに恐れるべきかということが問題になる。「立派な人でも、ともすれば打ち殺されることがあるではないか」と問う人がいる。しかし、立派な人でも自分がいつか死ぬということを覚悟しているものだ。苦しみにによって私達を迎え、また死によって私達に別れを告げるのが世の習いである。打ち殺されようと、あるいは自然に老衰の死を迎えようと、同じ所へ連れていかれる。立派な人はどのような死に方をしても、死によって大きな利益を得るものだ。すると更に問う人がいる：「立派な人でも多くの深傷を負わされることがあるではないか。」しかし、傷が40箇所であれ4箇所であれ同じことで、打ち殺された人はそれを嘆くことはできない。1箇所の傷でも10箇所の傷でも、同じようにすぐに死ぬことがある。いずれにせよ立派な人は、死が早く訪れれば訪れるほど、それだけいっそう早く苦しみから逃れられる。更に問う：「立派な人でも埋葬されないことがあるではないか。」しかし、そのようなことが起こっても全く問題はない。墓石が覆うはずであった人を、天がしっかりと覆ってくれるのだから。なるほど立派な人が埋葬されなければ、現に生きて

いる人々を大いに惑わせることになろうが、しかし生を終えた肉体は何の苦しみも感じない。立派な人は、死後に投げ捨てられようと焼かれようと、いささかも惑うことはなく、それ以上に幸福にも不幸にもなりえない。神によって身の上に起こることであれば、投げ捨てられようと焼かれようと変りはない。立派な人は、自分が死ぬということを恐れない。なぜなら、死は大きな苦しみから彼を救い出してくれるからである。

swaz der herre gît dem kneht, / er solz behalten, daz ist reht, /
und solz im geben swennerz wil.²³⁾

主人が下僕に与えるものを、下僕は大事にしておくべきだ。そして主人が返してほしいと望めば、当然ながらそれを主人に返すべきだ。

早死にするにせよ長生きするにせよ、誰でもいずれは死ぬ。立派な人にとって、死ぬことは主に命を返すことなので、きわめて好ましいことである。早死にするなら、命を早く返せるのでいっそう好ましいことである。

この世に生まれて来た人は、いずれ死んでこの世から去っていく。そのことは彼にとって、当然起こるべきことであり良いことなのだ。人は生きている間たえず苦悩して蠢くが、所詮神から借りた命ゆえ、死んで元の場所へ帰っていく。それゆえ、この世で死ぬほどの災いが自分の身に起こっても、全く恐れるべきではない。致命的な大病を患えば、時間が早く過ぎ去ってくれる。たいした病気でなければ、強い意志をもってそれを積極的に振り払うか、あるいはその病気が自分の所から立ち去ってくれるのを、じっと待つかのいずれかである。それよりもむしろ恐れるべきは、立ち去らせることも振り払うこともできない大病である。恐るべきこの大病は不徳という名を持ち、地獄の底に潜んでいる。

これまでの話から明らかなように、人はどれほど長く生きられるかという

ことに思いを致すべきではなく、むしろどのように生きていくべきかということ深く考えるべきである。良いことをしようが悪いことをしようが、人はだれでも結局死んでいかざるを得ない。しかし、その中でも正しく振る舞う人だけは、他の人よりも立派にあの世へ行く。この世で立派に生きようと努めなかった人は、死よりもむしろ死後に訪れる場所をこそ恐れるべきだ。人はどこで死ぬかということにも、気を配るべきではない。神から借りているものを返すのは、どこでそれを行おうと結構なことである。どこで返すにしろ、借りた命を正しく確実に返せるよう、心の準備をしておくことが重要である。本来なすべきことを行えば、どこにおいても幸せに死ぬことができる。神の御国へ通じている道は、どこにでも見出せる。しかし、地獄へ通じている道も、どこにでも見られる。人はどこで死のうと、すぐに平穩（天国）へ、あるいは不穩（地獄）へ送られる。それなのに、分別がないために死後の予測ができない人は、しばしば次のように言う：「私は故郷で死ななければ、葬儀で当然受けられるはずの大きな名誉を得られない。このことは実に辛いことだ。」故郷の町や村なら、埋葬に際して大勢の人々が集まり死を悼んでくれるという、浅はかな名誉のことを考えている。しかし、トマズインは次のように答える。

Ich sagiu daz ein guot man / der sol ahten niht dar an, /
wan swie er kumt hin ze got, / er ist geêrt von sime gebot.²⁴⁾

私はあなた方に言う：立派な人はそんなことに気を使うべきではないと。なぜなら、立派な人はどんなに惨めな葬儀を経て神のもとへ来ようとも、彼は神の命令によって名誉を授けられているのだから。

立派な人はこの世の名誉を求める必要はない。どのような状況で神の御国へ旅立とうと、神の命令によって名誉を授けられているのだから。自分の思い

上がった心に生涯気づくことのない人は、そのことによって死後どれほど不幸なことが起こるのか、全く予測することができない。死に際して、他の誰よりも自分に名誉を授けてもらおうなどと、くだらぬことに心を砕くべきではない。そのこと自体が、思い上がった考え方であるのだから。最高の飾りである天国の救いを得られない人は、その代わりに自分の墓を見事なものに飾り立てようとする。墓が平凡に作られているなら、その墓石は選り抜きの立派なものであると言ってよい。しかし、地獄に堕ちるような人は、大きくて立派に見える墓を作りたがる。大きな墓を作った人は、地獄の底で暮らす。墓を多くの松明で飾るような思い上がった人は、地獄の闇の中を這いずり廻る。他方で、今は墓が小さくても、その徳操高い人が天国に到達する頃には、墓は大きく立派になっている。自ら犯した罪で神の恩寵を失っていなければ、存命中に自分の身にどれほど酷いことが起ころうと、それが死後の幸せを妨げることはない。遺体を墓穴の底へ落とすときに、人々が賑やかに墓の周りに集まってくれても、神の恩寵を失っていれば、それは死後の幸せに全く役立たぬ。人が生前思い上がりのために欲しがった名誉、葬儀に際して人々に集まってもらった名誉などは、死んだ後では全く何の価値もない。

葬儀や墓で体面を飾ろうとする名誉は、死後には何の役にも立たない。むしろ存命中に正しく行動することが、確実に天国へ至る正しい道である。墓に松明が備えられていなくとも、天国の光に近づくようにすれば問題はない。自分の墓の周りに人々を賑々しく集めるのではなくて、むしろ考えや言動を正しくして、天使達に集まってもらえるように努めるのが良い。墓の周りに集まる親戚知人は、せっかく天使達が高く支えてきた故人を、無残にも墓穴に落として、放りっぱなしにするだけである。思い上がりの心を捨てて正しい振る舞いに努めれば、天使はいつも傍にいるのだから、天国へ行くことが可能である。

VIII.

ここでまたトマズインは助言を与える。親しい人が老衰や大病のためにもはや生きられないとき、嘆くのをほどほどにして快くあの世へ送るのが良い。私達は親しい人をたくさん持っているが、いずれは死別するのだし、その後また新たに親しい人ができる。確かに親しい人の死に際して心に悲しみを抱くべきであるが、しかしその悲しみが私達に別れを告げないうちに、私達の方から先に別れを告げることでできる程度の悲しみであるべきだ。人が長い間嘆き過ぎて、悲しみの方が先に私達に別れを告げる場合には、その人は余りに悲しみ過ぎているし、それでは決して幸せになることができない。親しい人の命を死が奪い取るときに私達に要求する悲しみを、私達は過大に自分自身に要求しているからである。そのことによって私達は、親しい人々を自分から捨てていることになる。上着を失くした人は、そのことに腹を立てるよりも、むしろ別の上着を獲得しようとすべきである。もし、上着を失くしたことに腹を立て過ぎて裸で歩くなら、その人は上着のことを余りにも悲しみ過ぎていると言える。それゆえ親しい人を失ったら、新たに自分に似つかわしい人と親しく交わるように努めるのが良い。自分の親しい人を失ったとき嘆き過ぎるのは良くないが、さりとて全然哀悼の意を表さずにあの世に送り出すのも好ましくない。

die guotn sol man verklagen schier: / wan ir sult gelouben mier /
 daz si sint verre gerner dort. / dâ von kumt ân grôze vorht /
 ein guoter man ze sinem tôt, / wan dâ hât ende sîn nôt.²⁵⁾

立派な人達の死をすみやかに嘆き終えるべきだ。なぜなら彼らは、はるかに大きな喜びをもってあの世へ行ったと信ずるべきだから。

それゆえ立派な人は、大きな不安を抱くこともなく死へ赴くのだ。

なぜなら、この世の彼の苦しみは、あの世で終わるからだ。

それゆえ彼らは、大きな不安を抱かずに死を迎えるのだ。それとは反対に、邪悪な人々は大いに嘆かれるべきである。死んだときから、彼らの本当の苦しみが始まるのだから。

トマズインは、親しき人達を早くあの世に旅立たせてあげるのがよいと助言はしたが、さりとて服喪期間を早く終えて賭け事で遊ぶことを薦めているわけではない。万が一そのようなことをするなら、それはやり過ぎというものだ。葬式の献花は、せめて服喪の間は暫くそのままにしておくのが良い。それを早々に片付けて、お目出度い花輪に作り変えるのは似つかわしくない。更に、舞踏・槍試合・弦楽の類も、謹んで控えるようにすべきである。妻に先立たれた男が、早々に喪があけるようにはからって別の女性を妻に迎えたら、これは歓迎されるであろうか。否、せめて一年間はそれを控えるのが良い。婦人についても同様で、喪が明けて一年も経たないうちに新しい夫を迎える女性は、全く幸せになることができない。そのような振る舞いは、全く邪なことであると法に記されている。更に、少なくとも一年の間喪に服して未亡人として暮らさなかった女性は、いつまでも名声を獲得することはできないし、彼女が礼節にはずれたことを取えて行うなら、亡き夫の財産を相続する権利すら失うと法に記されている。連れ合いが亡くなった後、法に基づいた結婚を一年間は差し控えるべきであるが、だからといって暗がりを好んで、結婚しないままこそこそと怪しげな同棲生活をするのは、全く邪悪な行動である。

暗闇で同衾している人は、ややもすると次のように言いがちである：「今は暗闇の中ゆえ、誰も私の姿を見ることはない。私がここで何をしようと、誰も知ることができないのだから、私の身には何のお咎めもないはずだ。」この大胆な発言に対して、トマズインは次のように諭す：「ごく身近におら

れる目撃者（神）を、存在しないと考える人は悲しいかな。暗闇の中でも、神の目はすべてをお見通しである。全知全能の裁判官の前へ贖罪のために出頭すべき人には、いずれ自分の罪科を表明しなければならない時が、すなわち最後の審判の時が必ずやって来る。他はどうであれ、せめてこのことだけはしかと信ずべきである。」

親しき人の死をあまりに激しく嘆き悲しむのを、トマズインは望んでいないと述べた。というのは、親しき人が死んだ後に、あの世で再び会うことができるはずであるから。しかし、そのことに異を唱える人がいる：「天国で親しき人に会えるとしても、どのようにしてその人だと分かるのか。」この問いに対して、トマズインは次のように答える：「もし、あの世で会える人がかつての親しき人であると分かなければ、何一つ欠陥があるはずのない完璧な神の世界に、欠陥があるという矛盾が生ずることになる。それゆえに天国では、必ず親しき人だと分かるのだ。」永遠に明るい昼の光が輝く所では、この世で隠れていたものがすべて白日の下に曝される。それゆえに、天国では何一つ隠されるものはなく、幸福の点でいささかも欠陥は生じえない。さらに、私達がこれまで会ったことがない人にも天国で出会い、永遠の喜びを獲得する。そもそも全知全能の神に初めて出会い、その方が神だと分かるほどの人なら、どうして親しかった人を見分けられないことがあろうか。神において私達は、この世にあるすべてのものを見て認識し悟る。かつて起こったこと、あるいはこれから起こるべきことを、神においてしかと見ることが出来るのだ。人がこの世から旅立ってあの世へ行くなら、見て役立つものを神において見て取ることができる。

この「第四の書」で詩人は、徳操というものは無数の喜びをもたらしてくれるものであるし、徳操高き立派な人は最終的に決して不幸に見舞われないと断言した。しかし、その徳操は常に、stæte の裏づけがあってはじめて効を奏するということも、通奏低音として鳴り響いた。「異国の客」を構成し

ている 10 の書は、すべてがそれぞれに有機的な繋がりをもって、全体が一つの円環をなす。第四の教えはここで終わるが、更にもっと教えを聴くべきであると、トマズインは忠告を重ねてひとたび筆を置く。

[注]

- 1) Joachim Bumke: *Höfische Kultur — Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter*, 2 Bde., München, 1986, S. 399f.
- 2) *ibid.* S. 403ff.
- 3) Heinrich Rückert (hrsg. v.): *Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*. Berlin, 1965. これ以後 WG と略す。
- 4) *ibid.* WG 12339-12340
- 5) *ibid.* WG 1819-1820
- 6) Wolfgang Stammer (hrsg. v.): *Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon*. Berlin u. Leipzig. “Thomasin von Zerklære” の項参照。
- 7) Peter Ganz (hrsg. v.): *Gottfried von Straßburg, Tristan*. Deutsche Klassiker des Mittelalters, Neue Folge Bd. 4, Wiesbaden, 1978, V. 181-186.
- 8) Karl Lachmann (hrsg. v.): *Wolfram von Eschenbach, Parzival*. Berlin, 1998. V. 715, 14-18. 更に I、1-30 も参照。
- 9) G.F. Benecke / K. Lachmann / L. Wolff (hrsg.v.): *Hartmann von Aue, Iwein*. Berlin, 1981, V. 1599-1604.
- 10) Helmut de Boor (hrsg.v.): *Das Nibelungenlied*. 20. Auflage, Wiesbaden, 1972, V. 155, 3.
- 11) W. Wilmanns (hrsg. u. erkl. v.): *Leben und Dichten Walthers von der Vogelweide*. Germanistische Handbibliothek (hrsg. v. Julius Zacher) II, Halle, 1916, S. 167 (L. 35, 29-30)
- 12) *ibid.* WG 4213-4219.
- 13) *ibid.* WG 4283-4288.
- 14) *ibid.* WG 4333-4339.
- 15) *ibid.* WG 4560-4562.

- 16) ibid. WG 4698-4700.
- 17) ibid. WG 4803-4808.
- 18) ibid. WG 4944-4948.
- 19) ibid. WG 5047-5050.
- 20) ibid. WG 5125-5129.
- 21) ibid. WG 5205-5209.
- 22) ibid. WG 5301-5304.
- 23) ibid. WG 5425-5427.
- 24) ibid. WG 5493-5496.
- 25) ibid. WG 5583-5588.